

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『社会学史』

大澤真幸 著 | 講談社、2019、638pp.

本書は、「社会秩序はいかにして可能か」を社会学固有の主題とし、「社会学の歴史は、それ自体が一つの社会学になる」として、社会学史について述べたものである。

本書の特徴として、内容については、社会学者に含まれることがない者をも深く取り上げていることが挙げられる。アリストテレスから始め、社会学の創始者とされることが多いコントが始まる時には既に120頁に達している。取り上げ方については、各人の個人的な事情や経歴に立ち入って説明することを徹底し、記述方法については、編集者に行った講義をもとにしたため、ですます調の文体である。

幅広い人々を、身近で具体的な例を交ぜながら大澤真幸流に取り上げ、こだわるところはこだわり、流すところは流している。ヴェーバーの社会的行為の四類型と支配の三類型は対応しているはずなのに、四と三で数が合わない。こうしたことにこだわって、話が進められる。こういうことにいつまでもこだわり続けられるのが、大澤真幸なのだと思う。

細分化されたバブルの泡の中に閉じこもり、バブル間の交渉が少なくなる中、本書のような取り組みは重要である。社会学の多くの大著が大学に所属していない時に著されたことが、本書で度々言及されている。大澤真幸が大学を去って既に10年以上が経つ。氏自身の社会学のさらなる大著を望みたい。

評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聰

『藤井聡太全局集 令和元年度版』

書籍編集部 編 | 日本将棋連盟、2020、319pp.

「18歳で私は四段に昇段、最年少棋士となったが、「名人候補」とは誰も言ってくれなかった。それは奨励会に中学生の谷川三段がいたからだ(『将棋世界 Special vol.1 谷川浩司』)」と述べた小林健二九段と同じことを、大学生の皆さんがもし将棋棋士だったら述べなければならないだろう。高校三年に藤井聡太がいるからである。中学二年でプロ四段になって以来の活躍は目覚ましく、彼を知らない者は日本にいないと言っても過言ではない。

藤井聡太の公式対局全局の棋譜と解説を載せた全局集が、毎年刊行されていることは特筆に値する。その最新版で、2019年度に終了した棋戦における全58局と、番外編として2020年6月4日の棋聖戦挑戦者決定戦を取り上げたのが本書である。12局は「重要対局詳解編」として、本人の率直なコメントとともに詳しく取り上げられている。

藤井聡太については数多くの著書が既に刊行されているが、彼を知るのに一番いいのは、全局集で棋譜を並べることである。一般的には無名の棋士相手の予選の棋譜が載るのも全局集ならではである。

本書に限らず、藤井聡太に対して温かい記述ばかりなのが興味深い。かつては天才棋士に対して冷たい指摘もあった。温かい視線の下で成長を続ける彼の今後に関心をもつ者は、将棋の世界にとどまらないうだろう。

評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聰

